

2026 年 9 月 23 日

留学報告書

南山大学長 殿

所 属 外国語学部

職氏名 教授 吉澤英樹

留学先：フランス共和国 社会科学高等研究院(EHESS)

期 間：2025 年 9 月 1 日～2026 年 8 月 31 日

目 的：フランス人プロレタリア作家アンリ・プーライユに見る 1930 年代フランス文学場における社会芸術の継承と革新の諸相の解明

1. 留学先と受入態勢

本留学では、フランス共和国パリの社会科学高等研究院(EHESS)歴史研究センター(CRH)の招聘研究員として研究に従事した。受入教員は、同センター長 (directrice) であるダイナ・リバール (Dinah Ribard) 教授である。

留学先として EHESS を選定した理由は二つある。第一に、本研究が主たる対象とするアンリ・プーライユ (Henry Poulaille, 1896-1980) の一次資料を収蔵するパリ郊外カシャン市のプロレタリア文学アーカイヴが、当時 EHESS とカシャン市との共同運営であり、同院に所属することで継続的かつ機動的な資料調査が可能となるためである。第二に、リバール教授が「労働のエクリチュール」を専門とする歴史学者であり、その受入のもとで、従来の文学研究の枠組みにとどまらない方法論の刷新を図ることができると考えたためである。

2. 研究活動

(1) セミナーへの参加と研究発表

リバール教授のセミナー «Histoire et récits du travail. Voir l'écriture» (労働の歴史と語り—エクリチュールを見る、UE472) および «Linguistique et histoire. Agir avec les mots» (言語学と歴史—言葉によって行為する、UE458、マリオン・カレル教授との共同開講)、ならびに CRH-GRIHL (歴史学と文学研究の学際的研究グループ) のセミナーに継続して参加した。発表と討議を重ねるなかで、テキストを作品としてではなく行為とその痕跡として捉える最新の歴史学の方法論から文学という制度を俯瞰する手法、およびそのために必要な資料収集の方法を学んだ。

2026 年 2 月 3 日には、UE472 において研究発表を行った（フランス語）。1925 年にガリマル社の「シナリオ (Cinário)」叢書の第一作として刊行された映画小説『自転車王』(*Le Roi de la pédale*, ポール・カルトゥ／アンリ・ドゥコワン共作) を対象とし、ツール・ド・フランス取材したスポーツ記者のエクリチュールが、新聞記事から小説、さらに映画へと支持体を横断して循環するなかでツール・ド・フランス主催紙『ロト』のアンリ・デグランジュが作り出した「コース上の労働者 (travailleurs de la route)」という労働者表象が構築・流通する過程を跡づけた。そのうえで、この労働者像を支持しながらも『ラントランシジャン』紙と通底する「文学性」をブルジョワ的なエクリチュール実践として斥けるプーライユの批評を分析し、エクリチュールそのものが階級関係に横断される場となる契機を実証した。本発表は論文にまとめ、EHESS の刊行する学術誌に投稿した。

あわせて、1920 年代における映画というメディアの芸術化にともなう文学の刷新が労働者の文学に与えた影響についての論文を執筆し、本学の紀要『アカデミア 文学・語学編』第 120 号に発表した。保守系批評家ゴンザーク・トリュックが 1925 年に『ラヴニール』紙で提示した「映画文学 (littérature cinématographique)」論と、それに応答するプーライユの映画言説とを突き合わせることで、1930 年のマニフェスト『文学の新時代』(Nouvel âge littéraire) に結実するプロレタリア文学構想の起点を明らかにしたものである。

(2) アーカイヴ調査

カシャン市のプロレタリア文学アーカイヴ、およびモントルイユ市の CGT (労働総同盟) アーカイヴに定期的に通い、1930 年代の非党派のプロレタリア文学運動が、19 世紀末に CGT 周辺に集ったアナルコ・サンディカリストたちの芸術観を継承するものであることを、人的交流、理論、思想の三つの観点から実証する作業を行った。書簡や草稿をはじめとする未公刊資料を体系的に収集・整理し、分析の基盤を整えた。

(3) 科学研究費助成事業との接続

現在研究代表者を務める科学研究費助成事業「世界恐慌後フランスの「ネオユマニズム」に見る 30 年代型ポストモダンのパラダイム」と接続させる形で、1930 年代の芸文場における思潮を検討し、社会芸術としてのプロレタリア文学と、AEAR (革命的作家芸術家協会) に見られるコミンテルン主導のプロレタリア文学との差異を実証する研究を進めた。その成果は、2026 年 3 月 7 日、南山大学ヨーロッパ研究センター主催のシンポジウム「せめぎあう国際主義とナショナリズムー「文化の擁護」会議を背景とした 1930 年代フランスにおける人間観の再構成」において発表した。作家を「魂の技術者 (ingénieurs des âmes)」と呼ぶルイ・アラゴンの立場と対比しつつ、プーライユと『反潮流』(À contre courant) 誌周辺の作家たちが、ファシズムにもスターリン主義にも回収されない「人間のスタンダードとしての労働する身体」を提示していたことを論じたものである。

(4) 研究成果の社会への発信

2026年5月9日には、カシャン市の文化施設メゾン・ラスパイユにおける市民講座で講演を依頼され、「L'art appartient-il à tous ? Henry Poulaille, du "Musée du soir" à Claude Okamoto」(「アートは誰のものかーアンリ・プーライユ、「夜のミュゼ」からクロード岡本まで」)と題してフランス語で発表を行った。カシャン市アーカイヴ所蔵の未公開草稿(整理番号2182、1952年3月)を手がかりに、プーライユが1935年にCGTの支援を得て創設した労働者のための芸術普及の場「夜のミュゼ(Musée du soir)」の活動と、戦後に彼が日本人少年画家クロード岡本(彫刻家・岡本豊太郎の子)に注いだ讃辞とを接続し、階級によって計られていた「真正性(authenticité)」の基準が、戦後に創造行為そのものの純粹さへと深化していく連続性を示した。日本人研究者として日仏の文化交流史の一断面を地元市民に紹介する機会ともなった。

3. 留学期間中の研究業績

【論文】

1. 「新時代のプロレタリア文学構想の起点としての「映画文学」ーゴンザーク・トリュックの評論を通じて見るアンリ・プーライユの1920年代における文学的課題」『アカデミア文学・語学編』第120号、南山大学、2026年6月、23-47頁(単著)
2. (投稿中) «L'écriture et la représentation des travailleurs dans *Le Roi de la pédale*» (映画小説『自転車王』をめぐるエクリチュール実践と労働者表象に関する論文、フランス語)

【講演・口頭発表】

1. «L'écriture et la représentation des travailleurs dans *Le Roi de la pédale* : Pratiques médiatiques transversales des années 1920 à travers la critique de Poulaille» (『自転車王』におけるエクリチュールと労働者表象ープーライユの批評を通じて見る1920年代のメディア横断実践)、フランス語発表) EHESS、ダイナ・リバル教授セミナー «Histoire et récits du travail. Voir l'écriture» (UE472)、2026年2月3日、EHESS (パリ・ラスパイユ校)
2. 「1935年文化擁護国際作家会議とアンリ・プーライユ『反潮流』誌にみる文学的抵抗」南山大学ヨーロッパ研究センター主催シンポジウム「せめぎあう国際主義とナショナリズムー「文化の擁護」会議を背景とした1930年代フランスにおける人間観の再構成」、2026年3月7日 南山大学
3. «L'art appartient-il à tous ? Henry Poulaille, du « Musée du soir » à Claude Okamoto » (「アートは誰のものかーアンリ・プーライユ、「夜のミュゼ」からクロード岡本まで」、フランス語発表) カシャン市文化施設メゾン・ラスパイユ市民講座、2026年5月9日、カシャン市(招待講演)

4. 成果と今後の課題

滞在中は、セミナーやシンポジウムへの参加と研究発表を通じて人的交流を広げ、文学研究および歴史学研究の最先端に触れて自身の方法論を更新することができた。それにとどまらず、日本ではアクセスすることのできない一次資料を腰を据えて数多く収集し、整理することができた。本在外研究により、当初の目的とした 19 世紀末から 1930 年代にいたる社会芸術の系譜化、および諸メディアとの関係性における文学の機能の解明について、多くの知見を得ることができた。これらの成果は、今後、論文および書籍の形で順次公刊していく予定である。

他方で、労働者の文化の再生産と普及を考えるうえで、1930 年代における成人文化教育の役割という新たな課題が浮かび上がってきた。これを本研究の延長線上で扱うか、あるいは独立した次の研究として展開するかについては、今後の検討課題としたい。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった大学、ならびに外国語学部およびフランス学科の同僚諸氏に、心より感謝申し上げる。